
始まりの終わりの始まり

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりの終わりの始まり

【Nコード】

N83240

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

あの昔の恋を飲み込んだまま、同じ場所を旅行する春人。

昔と同じ風景、変わった風景、それをあの時とは違う人と体験する。

そんなときに何を思うのか？

ゝ1ゝ
(前書き)

少し前に本気で書いた小説です。

「1」

「5」

雑踏の中に、響きわたる声。

「4」

立ちすくむ身体。

「3」

のどの奥がヒリヒリする。乾いて、ねばついて、言いたい一言が出ない。

「2」

まっすぐと見つめるその眼には、不思議な力がある。

「1」

目を離すこともできずに、ゆっくりと動く口元だけを見つめていた。

「0、タイムオーバー」

それが、最後の記憶となった。

それからというもの、その記憶がつみあがることはなかった。

なびく髪、迷いのない歩き方、手を伸ばしても何もつかめない。

それは、その瞬間から終わり、そして始まったのだった。

「えつとねえ、じゃあねえ…タイ、タイに行ってみたい。」

白い壁にアンディウオーホールの絵が飾ってあるおしゃれなカフェで、大沢かすみは笑顔で言った。

道路に面した壁は一面ガラス張りで、一客何十万もする椅子が飾ってあるこのカフェは、インテリアだけではなく、しっかりとした料理も出すということで若いカップルだけではなく、少し年配の夫婦なども足しげく通う。

その中のメニューの中に、期間限定でのトムヤムクンがあった。

それを箸でつつきながら、かすみはタイを思いついたのだった。

「タイ…タイか…」

と、言葉に詰まりながら、吉田春人は答えた。そして、気まずい気持ちがかすみに伝わらないよう、ごまかすかのように薄く茶色に染めた坊主頭をカリカリかいた。

春人とかすみは、交際を始めて1年になる。

春人は市内のイタリアンレストランの厨房で働いている。オープン

キッチンの小さな店で、カウンターしかない店内では、料理の腕と同様に接客も大切な要素の一つとなる。

その店に、かすみは同僚の女の人とやってきた。

かすみは、医療系の事務をやっている。9時に勤務し、5時の定時に仕事を終わらせるのが毎日の目標だった。毎日毎日、目まぐるしく降ってくる仕事を、いかに効率よく終わらせるか考え、アフター5には同僚と一緒に食事に出かける。

そうして、食べ歩きに出かけるのが小さな趣味としていた。

ある日入ったイタリアンレストランで、春人の作るカルボナーラの味に惚れ込んだかすみは、店に通いつめ、いつしか店の外でも会うようになった。

そんななんてことのない日常の中のひとコマだった。

「そう、タイ！料理もおいしそうだし、物価も安いっていうからさ。年末年始は、お店も休みでしょ？」

「まあ、オーナーが里帰りするからね。29から、3日まで休みになってるけど・・・」

「じゃあ、年末年始に行けるよね？春人さんは、海外旅行には行つたことあるのかな？」

「…あ、ああ。一応、料理人のはしくれだから、いろんな国食べ歩きに行つてはいるんだ。」

春人の口調はぎこちない。

「やっぱりプロの料理人は違うのね、なんだかかっこいいな。」

「いや、でも、今まで韓国とタイとイタリアにしか行ってないから、えらそうなことは言えないんだけどね。」

「それだけ言っただけじゃ足りない？タイにも行ったことあるんだ！なら安心だね。何歳くらいの時に行ったの？」

かすみは春人がタイに行ったことがあるということとでちょっと興奮しているようだった。その反面、春人は返答に困っていた。

「イタリアには、18の時、高校卒業してから行ったんだ。そのあと、23の時、韓国に一人であつと食べ歩きで行ったかな？」

「なるほど、韓国も料理おいしそうだもんね。タイにはいつ行ったの？」

「うん・・・2年くらい前かな？」

「ねえねえ、やっぱりタイの料理って美味しい？」

「うん、けど、クセがあるから、好き嫌いは分かれちゃうと思うよ。日本で食べるそのトムヤムクンみたいなタイ料理は、日本人向けにしてあるからさ」

春人は、指でかすみの前にあるお椀をさして言った。トムヤムクンは、白いおしゃれなお椀に入っており、なんだかタイ料理には見えなかった。

「そうなんだ、タイには独りで行ったの？」

何気ない一言に、春人の顔が曇った。

「あ、ああ。もちろん独りで行ったよ」

春人の表情に気づいたのか、かすみは追い打ちをかけた。

「本当？彼女と行ったんじゃないの？」

「そんなのはいないさ。料理の研究をしに行ったんだよ」

「うーん・・・」

かすみは、上目づかいに春人を見る。

「しかたないなあ、信じてあげる！春人さんは、嘘をつけるほど器用な人じゃなさそうだもんね」

「そうかなあ、器用な方だとは思ってるんだけど・・・ま、信じてもらえたならいいや」

少しほっとした表情で、春人は自分の前にあるタコライスに取り掛かった。

「じゃあ、タイに決定ね。私が、旅行会社に飛行機の予約を入れるね。だから、向こうに行ってから、春人さんに行く場所とか決めてもらっていいかしら？」

「あ、ああ。いいよ。あんまり遺跡とかには行かなかったんだけど、いいかな？」

「うん。私はおいしいものを食べられれば、それで幸せだから」

スムーズに流れる会話、スムーズな言葉のキャッチボール、春人はかすみと一緒にいることで、確かな安らぎと心地よさを感じる。それは確かだった。

ただ、タイに行くとなると話は別だった。

あの時、つかめなかった手。なびく髪、そしてもう2度と振り返らなかつた。その顔は思い出そうとしてもシュッとモヤがかかったようになってしまう。

あんなに夢中になったはずだったのに。現実と夢のはざまに置いてきてしまった感情があ国には詰まっている。

そんな中に、かすみと一緒に行く？はたして自分は耐えられるのだろうか。そして、かすみを傷つけてはしまわないだろうか？

そんな想いとともに、タコライスをかきこみ、ビールで流し込んだ。

く2く

「新千歳空港行きは3番線のホームより発車になります。なお、今日は大雪につき5分ほど遅れて運行していることをお詫び申し上げます」

春人は、小さなスニーカーを引きずりながらその放送を聞いた。

タクシーから、駅に入るまでの少しの間で、頭にはもう雪がつもってしまう。このまま、飛行機が飛ばなければいいのにな、と春人は心の中でつぶやいた。

早朝の札幌駅には、多くのスニーカーを持った人であふれていた。年末年始の旅行は、今日12月29日からスタートするからだろう。せつかくの旅行が雪で邪魔されてはたまらない、と駅員に詰め寄っている人もいた。

切符を買い、待ち合わせの改札に向かう。

ゴロゴロゴロ、スニーカーの音が、雷鳴の音のように聞こえる。

恋人と行く海外旅行、心は晴れ渡って当然なのだが、春人の心には暗雲たちこめていた。

「春人、遅い！すつごい待った！」

「そんなこと言ったって、時間通りだよ」

「私は、15分前に来たの！楽しみにしてたんだから、そんなの当

たり前じゃない。時間どおりに来るなんて、愛が足りないわ。ごめんなさいは？」

「いやはや、理不尽だな。わかったよ、ごめん、ごめんよ」

「しつかたないな。許してあげよう。あとで、マックおごってね」

「春人さん、おはよう」

かすみの声で春人は我に返った。

「すごい雪だったね。タクシーで来たの？」

かすみは、ベージュのコートを着て、大きなスーツケースを傍らに置いていた。その上に、大きめのボストンバックが置かれていた。

「あ、ああ。タクシーも遅れるかと思ったよ。すごい荷物だね」

「うん、初めての海外旅行だから何を持っていいかわからなくて・・・やっぱり多かったかな？」

「いや、別に大丈夫だよ。じゃあ、遅れてるらしいけど、ホームまで行っちゃおうか」

と言いながら、春人はかすみの持つボストンバックを持とうとした。

「あつ、いいよ。自分のバックだから自分でもたなきゃ」

「いって、スーツケースも大きいんだから、気にしないでいいよ」

春人はそう言いながら、無理やりボストンバックを持って歩きだした。

「ありがとう、春人さんって優しいのね。そういうのって、女の人にモテると思うよ」

「そうかな？普通だと思うけど」

「そうやって、さらりと言えるのがモテる人なのよ。鼻が高いな。タイでニューハーフの人にモテて、浮気しちゃだめよ」

かすみは笑ってそう言った。

春人は思い返す。あの日、遅いと怒鳴られて、持っていたカバンを投げつけられたのを。あいつは、たくさんの荷物なんて持ってたかった。

「どうせ、向こうにもいろいろ売ってるわよ。大丈夫、国が違ってたって同じ人間なんだから。なんとかなるって！さ、カバン頼むね。私の全財産、春人に任せるから」

無邪気な笑顔で語る彼女の姿がどうしてもちらついてしまう。

ぼんやりしている春人に、かすみは声をかけた。

「春人さん、大丈夫？昨日も遅かったんじゃないの？実は具合悪かったりしない？」

「いや、大丈夫。ちょっと考え事してたんだ。さ、行こうか。そろそろ列車も来るだろうし」

「うん、いやゝ楽しみだな。タイに行ったら、何を食べようかなゝ？ガイドブック、何冊か買ってきたから、一緒に勉強しようね」

ホームに向かうかすみの姿を見ながら、春人はやっぱりやめておけばよかったかな、と思っていた。

行き当たりばったりな旅をしたあの時と比べ、今回の旅はあまりにも違いそうだ。

ゴロゴロゴロ…スニーカーの音がさっきより大きくなったように、春人には感じていた。

溜息をかすみに気づかれないようにして、春人は顔をあげた。楽しむんだ、恋人との旅行を！自分に言い聞かすように春人はかすみに声をかけた。

「本当に、楽しみだね！」

く3く

春人とかすみがスワンナプーム国際空港に到着したのは、もうかれこれ3時間ほど前だった。

大雪で飛ぶかどうか心配された新千歳から成田へとび、乗り換えの後タイに向かう。

成田から、タイまではおよそ7時間半ほどである。

年末年始ということで、飛行機は満員で家族連れも多い。

7時間半の長旅は春人にもかすみにも辛いものとなっていた。飛行機の中では、日本ではレンタルもされていないような最新の映画もあったが、満員の機内では集中することもできず、深い眠りなどにもつけるわけがない。

特にかすみの横に座っていた中年の男のいびきがひどく、辟易して春人はわざと大きな音を出し、起こすこともあった。

言葉が少なくなったかすみい春人はいろいろと世話を焼いてやったのだった。

空港についてから、現地のツアーコンを探す。とにかく人、人、人の渦にのまれ、押し出されながらやっとのことで見つけ、バスに乗り込み、説明を受けて、へとへとになりながらなんとかホテルにたどり着いたのだった。

大きなスーツケースをベッドの横に置き、春人はかすみに声をかけ

た。

「大丈夫？結構時間かったよね。具合とか悪くない？」

「うん・・・ちよつと人に酔っちゃった・・・」

「年末年始だからね・・・前の時はこんなひどい人ごみではなかったんだけどね。」

ベッドに腰をかけて靴を脱ぎながらかすみが答える。

「そつえば、前の時はいつ頃来たの？」

「今と同じ乾期の冬だったよ。でも、今回みたいに年末年始じゃなくて、休みが明けた時期を狙っていったんだ。あの頃は、まだ店もそんなに忙しくなくて、オーナーに修行だと言ったら連休をくれてさ。」

「そうなんだ。いろいろと食べ歩いたりしたんでしょ？」

「うん、まあね。でも、さっきのガイドブックにもあったけど、屋台の食べ物とかはあんまり積極的に食べない方がいいかな？前の時も、ちよつとお腹下しちゃったんだよね。」

「タイの料理つてきつそうだもんね。屋台とかはちよつと汚くて、私も苦手。いいよ、きちんとした店に行こうよ。そっちの方が、春人さんにも勉強になるだろうしね。」

「屋台には屋台の味があつて、俺はけっこう好きなんだけどね。さて、荷物ほいたら、ご飯でも食べに行こうか。」

「そうね。でも、ちょっと疲れちゃったから。一眠りしていいかな？」

枕に顔をうずめながら、かすみは上目づかいで春人を見た。

春人は、スーツケースを開ける手を止めて、小さくため息をついた。

「いいよ。じゃあ、俺はせっかくだから、ホテルの中でもうろうろしてくるかな？」

「ごめんね。やっぱり飛行機が辛かったみたい・・・せっかく来たのに、ごめんね。」

春人は、汗だくになっていたＴシャツを脱ぎ、新しいＴシャツを着て用意をすると、かすみの横に座った。

「なんも、気にしなくていいよ。んじゃ、少しゆっくりしなさい。」

「ありがと。春人さん、好き。」

目を閉じたかすみのおでこに春人は軽くキスをすると、立ち上がりドアを開けた。

本当を言うと、腹が減ってしかたなかったので、近くのコンビニにも行こうかと思っていたのだった。

ホテルのエレベーターを降り、エントランスを抜けると、ムアツとした熱気が頬をさす。

ホテルの横はチャオプラヤ川が流れており、ちょうど太陽が川の向こうに消えようとしていた。

川辺を散歩すると、観光客向けだろうが、屋台が立ち並んでいた。

その中で、揚げ餃子の屋台があつた。据えたような匂い、タイならではの匂いであつた。

あの時も、こうやって揚げ餃子を食べた気がする。

「だーかーらー、タイに来たのになんだってレストランでご飯を食べなきゃならないのよ！ローカルフードを食べてこそその研究でしょ？旅行でしょ？観光客向けの味なら、日本でも食べれるわよ！」

「せっかく着いたんだから、さっさと出かけましょうよ。ホテルの中なんて、寝るときだけでいいのよ。経験、体験、その積み重ねこそ旅行の意義でしょ？」

「まずっ、この餃子、くさい！でも、これがタイ人にはおいしいって感じるのよね？それなら、タイ人の味覚は根本的に日本人とは違うのよ。だから、春人も同じよ。日本人に合うイタリアンを作らなきゃならないってことね。」

揚げ餃子を買って、一口に入れた。

「・・・やっぱりまずいよ。なあ、幸？」

誰にも聞かれないその一言は、太陽と一緒にチャオプラヤ川に溶けて行った。

朝焼けは霧の中から始まる。

タイの高層ホテルのビル群を春人は見上げた。

上の方は霞にかかっている、見えない。

それは、タイという地域の特色なのだろうか。

タイの交通渋滞は世界最悪と言われている。貧民層と富裕層が混沌と入り混じる町。ピカピカのベンツも、荷台にたくさんの人を乗せたトラックも、みな同じように道路に並ぶ。

何百万台という車から吐き出されるスモッグのせいで、空がくもっているのか。春人にはわからなかったが、間違いなく言えるのは気持ちのいいものでないということだった。

春人とかすみがタイに来て、もう2日目である。

初日の夜は、ホテルの近くのタイ料理屋に行き、ほろ酔いのままホテルへ。

春人は夕食を食べながら、

「エキゾチックな夜にしようね」と笑って話すと、かすみは「バカ」といって顔をそむけるのだった。

恋人として付き合いを続けている以上、体の関係はもちろんあるの

だが、イマイチしっくりこないというのが春人の思いだった。

人間の体にもいろいろな種類があつて、合うものと合わないものがある。それは努力とか思いだけではどうにもならないんだろつな、というのが春人の考えである。

それでも、タイの夜は濃密に更けていったのだが。

ホテルのビュッフェを食べながら、春人は話し始める。

「今日はどういう予定なんだっけ？ ツアー、申し込んでるんだよね？」

かすみは、タイまで来たというのにヨーロッパスタイルに決めている。クロワッサンにコーヒー。欧米か！と突っ込みたくなつた。

「うん、春人さんに任せてもよかったんだけど、私は海外初めてだったから、申し込んでしまったんだ。ごめんね」

上目づかいで春人の目をのぞきこんでくる。かすみは、この顔が得意のようだ。

「いや、この前に来た時は、食べ歩きで観光らしい観光をしなかったからちようどいいよ。で、どんなところにいくんだい？」

「えーつとね、エメラルド寺院って有名なところとか、暁の塔って有名なところ。知ってる？」

「うーん、聞いたことあるような、ないような」

「さんざんガイドブック見せたじゃない」

ぷーっと頬を膨らませながらかすみはぼやいた。

「じゃあ、寝っ転がってる仏さまの寺院は知ってるよね？」

「あ、それならわかるよ。大丈夫」

「そういう寺院は、帽子とか靴を取らなきゃならないから、気を付けてね」

「OK！」

平和な会話が続いた。ふと、春人は窓の外に目をやる。棧橋に船が止まり、現地の人間がぞろぞろとあふれて出てくる。

そういうものを見てみると、ああ、異国の地に来たんだな、と春人は思うのだった。

そして、昔の恋人を探している自分にも気付くのがあった。見つけることなんて、出来るわけもないのに。

「春人さん、乗りたいの？」

「え？何に？」

「いや、船をずっと眺めているからさ。乗りたいのかなって」

視線を変えずに、春人は言う。

「うん。前の時も乗ったんだ。夕日が沈むころ。川がオレンジに染まるのを見て、感動したのを覚えてる、きれいだったんだよね」

ばあつと、顔を輝かせてかすみは答える。

「すごい！そういうの見てみたいな。ねえ、ガイドさんをお願いしてみようね。なんか、ロマンチックじゃない？」

春人は、純粋な年上の女性を見つめ、「ああ」とか「うん」とか気のない返事をするのだった。

「見て、春人！夕日がきれいだよ。川も人もビルも、みんなオレンジ色！何か一色に染まるのって、素敵よね。一日のうち、一瞬だけみんな同じになるの。それって、その一瞬だからきれいに見えるんだろ？ね。人もそうかもね。一瞬だけわかり合える、一つになれる、みたいなの。・・・いや、エッチなこといつてるんじゃないって！」

オレンジ色の笑顔は、かすみには持っていないものだった。

その影を求めて、今回のタイ旅行を受けたのかもしれない。その影を、振り払うために今回の旅行はあるのかもしれない。

春人は、振り切るように船から目を離し、かすみと同じクロワッサンを取りに席を立つのだった。

そして、その日の午後、そのオレンジ色の笑顔をもう一度見ることになるのは、春人には全く想像できるわけもなかった。

世間は広いようで、狭いのだ。

く5く

ルンピニ・ナイトバザール

大きな公園の横にある、タイにいくつかあるバザールの中の一つである。

ここは、その中でも夕暮れになると人がどこからともなく集まり、夜になると活気があふれる。

大きなビアガーデンもついでおり、観光客にはもちろん、地元の人間にも活用されている。

売っているものと言えば、観光客向けのおみやげはもちろん（最近ではD & Gやデューゼルの偽物が多い。一昔前はエイプが主流だったが）、洋服、化粧品、アロマオイル、靴やカバン、そして、インテリア用品である。

春人とかすみは昼間に市内観光を終え、夕暮れとともにこのナイトバザールにやってきたのだった。

「うわあ、すごい人！どこから見ていいかわからないね。楽しみ楽しみ！」

かすみはキョロキョロしながら、はしゃいでいる。

現地ツアースタッフのハルさんがライトバンから声をかけた。

「バンゴハンはここでどうぞ、ビールもある。ここは、パッタイ、

おいしい。」

「パッタイ？」

春人は汗を手にとっていたタオルでぬぐいながら聞き返した。夜になつたといえど、タイの気温は下がらない。

「日本の焼きそば、みたいなもの。おいしい。ビール、パッタイ、これ最高」

ハルさんは、20代後半の現地のタイ人だった。日本に言語留学を1年しておる。太いまゆげがトレードマークのいい男だった。

「ハルさん、いつ迎えにきてくれるの？」

もうすっかり打ち解けた春人が聞く。

「後、2時間後ね。僕も、ご飯食べてくる。ビールも飲んじゃおうかな？」

ニツと白い歯を見せて、ハルさんは笑った。本当に仕事中でもお酒を飲みそうだから怖い。

「いいんじゃない。酒飲んでるみたいなテンションだしさ。」

春人も笑いながら答えた。

ハルさんと別れ、春人とかすみは、ビールを片手にバザーに繰り出した。

春人は、自分用のＴシャツ、シューズ、お土産用のチョコレートなどを買い、かすみは化粧品などを買い、お互いに満足することになった。

「春人さん、なんかこの先の区画は、アートやインテリアのものを置いてみたい。お店におけるようなもの買って行ったら、オーナーに喜んでもらえんじゃない？」

春人は、市内のイタリアンレストランに勤務している。店の名前は「チエルヴィーチュ」、イタリア語で「うなじ」の意味である。オーナーの趣味なのか、フェチなのかは、春人には未だ聞けず仕舞であつた。

「そうかもね、何かオリエンタルな壁掛けとかなら、意外とマッチするかもしれないね」

「でしょ？行ってみましようよ。」

かすみは春人の手を引く。

その店は、その区画の中にあつた。

ナイトバザールは、基本的に屋外にある屋台なのだがその店は壁があり、他の店とは一線を画していた。

扉を開けると、ヒヤツとした空気が春人の頬を触れた。エアコンがしっかり聞いているようだ。

店内には、様々なインテリア用品が置いてあつた。日本にもよくある、インテリア雑貨屋さんという感じであろうか。

驚いたのは、その値段である。イームズのチェアはレプリカなのだろうか。日本で買う3分の1ほどの値段で置いてある。

かすみは年頃の女性であるので、インテリアにも興味がある。目を輝かせながら、店内を物色していく。

春人は、そんな中、壁掛けの絵を見つけた。

真っ黒の背景に浮かびあがる、大輪のひまわり。写真のようなリアルさがある。

その絵を見て、春人は動けなくなった。なんだか、体の中に電気が走ったようである。

どうしてこの絵が気になったのかはわからないが、春人は茫然とその絵を見つめていた。

「春人さん、この絵が気に入ったの？ひまわり？」

かすみが後ろから声をかける。

「素敵な絵ね。これ。私もこういうの好きだな。」

春人は答えずに、絵を見つめている。

「これ、お店にいいんじゃない？これ、買いましようよ。ねえ春人さん。・・・ねえ？」

「ん、ああ。そうだね。なんだか、すごい俺もこれに惹かれたんだ

よね。なんでだろう？なんかすごいグツとくるんだ。」

「いくらくらいするんだろう？お店の人、いないのかな？サワディ
ーカップ」

片言のタイ語で、かすみは控えめに声を出した。奥の扉から、一人の女性が出てくる。

「はい、あら日本の方ですか？」

中からは、同じ日本人の女性が出てきた。

その姿を見たとき、春人は理解した。なぜ、この絵に惹かれたのか。

このひまわりは、この女性に似ていたんだ。

「いらっしやいませー」

その女性は、春人を見て、一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに何事もなかったかのような顔をした。肩までのショートボブの茶色の髪を揺らし、笑顔で言った。

春人は、茫然として先ほどまで絵を見つめていた代わりに女性を見つめていた。

その顔を忘れる訳がない。2年前のあの日、空港の改札の向こうに消えていったあの笑顔だった。

女性と目が合った。

「幸・・・」

春人は声をもらした。

「あ、この絵ですね？これ、私が描いたんですよ。なかなかうまくできたと思って。」

女性は、笑顔で話しかけてきた。春人の言葉をかき消すように。

「あゝ、お客さんたちはハネムーンですか？幸せそうでいいですね？」

「いやいや、違いますよ。でも、二人で来る初めての海外旅行なんですよ。ね、春人さん？」

かすみは、店員が日本人だったようで、安心した様子だった。ハネムーンという言葉にまんざらでもない様子だった。

「ああ、うん。そうなんだ。」

幸は春人に目を合わせずに言った。

「そうなんですかゝ、うらやましいですね。私も、2年前にこつちに引っ越してきてから、彼氏なんていませんもん。」

「あら、2年前にタイに？どうしてタイに引っ越されたんですか？」

かすみは現地であつ日本人に興味津々だった。

「もともと私は、日本のインテリアショップで働いていたんですけ

ど、こつちで買付とかして働かないかって話があつたんですよ。ところで、お客さんたちは、日本のどこから？」

「札幌なんです。」

幸はこれ見よがしに驚いたように答える。

「札幌なんですか？！私も札幌に住んでいたんですよ。今ならなまら寒い時期ですよね。」

「あつ、北海道弁だ。すごい、こんな偶然つてあるんですね？ね、春人さん。あれ、春人さんどうかした？」

春人が何も言わないのに気づいたかすみは言った。

「いや、なんにも。こんな偶然つてあるんだね。ところで、タイに引越してから大変じゃなかったですか？」

春人は、なるべく平然を装いながら言った。

「大変でしたよ。食べ物全然違うし、言葉は通じないし。日本語少し通じる人がスタッフにいたから、その人を頼りながらなんとかやってきました。」

「すごいなあ。私なら絶対独りで外国に住むなんて、できません。不安じゃなかったですか？」

「めちゃくちゃ不安でしたよ。本当はね、一緒についてきてほしい人もいたんですけど、振られちゃって……って、なんだってこんな話してるんでしょうね？」

からからと笑いながら幸は話をやめない。春人が何かを話す暇を与えようとしていないようだ。

「この絵の値段でしたよね。えっと・・・これくらいでいいですよ？」

店の電卓を見せながら幸は言った。破格の値段である。

かすみは驚きながら言った。

「そんな値段でいいんですか？日本のなら、絶対そんな値段じゃ買えない！」

「同じ道産子に出会えたってことでね。オマケです。でも、他のスツッフに言ったらだめですよ。」

幸は、絵を壁から外し、丁寧に梱包し始めた。

春人は、その一挙一動を見ていた。もう2度と見る事ができないと思っていた幸が目の前にいる。

幸も気づいていないはずがない。でも、女の人と一緒に来ている春人のことを気遣っているのは、明らかだった。春人も、その気持ちを無駄にすることはできなかった。

それは、2年前のことを責めているようにも春人には感じるのだった。

かすみは、レジでお金を払い、絵を受け取った。

「ありがとうございます。いや、こんなに安くて嬉しいな。またタイに来ることがあったら、ぜひきますね!」

「札幌にも、うちの商品を扱ってる店ありますよ。HPもありますから、見てみてください。これ、名詞にHPのアドレスあるんで。」

と、言いながら名刺を差し出してきた。春人も名刺を受取る。

名刺には、日本語で、「青山幸」という名前が書かれていた。

「あれ？日本語ですか？」

かすみが気付いて言った。

「そうなんです。もうすぐ日本に帰ろうと思っていて、少しでも日本人とネットワークを作ろうと思っているんです。だから、日本人のお客さんにはこうやって渡してるんですよ。友達になってくださいね。」

オレンジ色の笑顔で言いながら、幸は手を差し出してきた。

「あはは、じゃあ、日本に戻ってきたらぜひ。」

社交辞令を言いながら、かすみは差し出された手を握り返す。

「ボーイフレンドのあなたもよろしくね。」

幸は少し、含みを持たせた目を春人に向け、手を差し出してきた。

春人は、恐る恐る手を伸ばす。

「さっきの話ですけど」

春人は、からからに乾いたのどを振り絞るように言った。

「2年前の別れた人が、もう一度やり直したいって言ってきたらどうします?」

春人は幸から目をそらさずに言った。かすみは、不思議そうに見ているが構わなかった。

幸は、手をぎゅっと力を込めながら握って言った。

「どうでしょうね? 私には、わかりません。やり直すかもしれない。」

ニツコリと笑って、幸は言った。

「ありがとうございます。サワディーカップ」

もうすっかり発音の良くなったタイ語で言いながら、幸は挨拶をして、奥に消えていった。

春人とかすみは店内に出た。

ムアツとした熱気が春人には、息苦しかった。

「ねえ、春人さん。私ならね、たぶん2年前の別れた人が現れたら、まだ新しい彼氏ができてなかったらついていっちゃうと思うな。」

かすみは、春人の腕を取りながら言った。

「でも、なんであんな質問したの？」

不思議そうに言う。

春人は答えた。

「なんで・・・なんだろうね？」

ナイトバザールは、どんどん人が増え活気が増していく。

春人には、この喧騒がありがたかった。ぐちゃぐちゃの心のまま、がやがやしたビヤガーデンに向かい、ビールを呷りたかったのだ。

「いやー、タイ楽しみだね。本場の味はやっぱり酸っぱいのかな？」

ホットパンツからスラリと伸びる足がまぶしい。

ニヤニヤしてしまうのを悟られないように、春人は幸から視線を外した。

話は2年前にさかのぼる、春人は今のイタリアンレストランに勤め始めた初めの年、幸と二人でタイに向かっていた。

成田空港から飛び立った飛行機の中、幸はもうタイに向けた格好をしていた。

ホットパンツに小さめのTシャツ、薄手のカーディガンを着ている。

小さめな体だが、細い体には健康的な色気があった。

「でも、飛行機って肩こるね、映画も飽きたし、お酒も飽きた。早く着かないかな？」

うーん、と上に背伸びをすると、小さめのTシャツからへそがチラリと見える。春人は人知れずドキドキした。付き合ってから3年、まだまだときめきを忘れたことはない。

「おいおい、へそ見えてるって！」

「いいじゃん、減るもんじゃないし！あー、それって独占欲じゃないかな」

いの？」

「なっ、馬鹿、違うって！」

「絶対そうだよ。私は春人のものじゃないよ。春人専用ではあるけど、他の人は見るだけ。大丈夫、大丈夫」

からからと笑って幸は言うのだった。春人は、苦笑いを返す。付き合いは深まっても、ペースは幸が作るのだった。

タイに着いてから、二人は夢のような時間を過ごした。

「うわー、すごいね、タイの屋台って。安いから、とりあえずフードファイトと参りますか」

と言いながら手を取って、幸は走り出した。

「まずはネームピン、焼き鳥みたいなもんかな？もうちょいしつかりあっためてほしいよね」

幸は自分がほおばり、そのあとに春人の口にも運んでくれる。

「自分で食べれるって。串を人に向けるな、危ないよ」

「私のような、美人に食べさせてもらえる幸せをかみしめなさい」

食べ終わった串を幸は、自分のカバンにポイツと入れた。幸は絶対にポイ捨てはしない。

「次はここね。これは・・・マンゴー？かな？」

身振り手振りをしながら、幸は屋台で料理を調達し続ける。

「タレもくれたよ。これにつけて食べるのかな？」

「そうだと思うよ。青い身をしてるけど、確かにマンゴーの匂いがある」

「さすがはイタリアンシェフ、頼りになります。あつ、タレはなんかみたらし団子みたいな味がする。おもしろいね」

屋台をめぐる春人は、タイ料理と一緒に幸せをかみしめていた。

フリーで屋台を回ったり、酒を飲んだりしながらあつという間にタイ旅行は最終日。

春人は、ホテルの荷造りをしていた。男の自分はスーツケース一つ。女の幸は、大きめのディパックが一つ。

幸は化粧っ気がないので、女性のそういうものが少ないのはわかるが、あまりにも荷物が少ないと春人は不思議に思っていた。おみやげなどを買っていた様子もない。

「ねえ、幸、どうしてこんなに荷物が少ないの？職場のみんなのおみやげは？」

シャワーを浴びて、バスタオルを巻いただけの幸に春人は声をかけた。

少し、間を空けながら幸が答える。

「んー、買ってないよ。いらんとかいってたから買わなかった。ってか、後ろ向いてて着替えるから、エッチ」

春人は後ろを向けさせられ、シウルシウルと着替える音に少し興奮しながら続けた。

「いらんっていつても、普通は買うもんだよ。そういうのは、社交辞令ってやつさ」

「私は嘘を言う人が嫌いな。いらんって言ったから買わなかった。それでいいじゃん」

「ま、間違ってはいないけど・・・」

「この話はこれでおしまい」

と言って、幸はなんだか悲しげな顔をした。

幸は自分の意見を曲げない。間違ってることも少ないのだが。

端的に、的を得ている。そのくせ、人には押し付けようとはしない。

春人にまぶしく映る魅力だった。春人は優しすぎて、相手に合わせてしまうところがあるのを自分でも知っていた。

ホテルを出て、空港に向かうバスの途中。幸は、無言だった。珍しく。

春人はウトウトしていた。

「ねえ、春人。私、嘘ついちゃったの」

「・・・ん？嘘？」

目をこすりながら春人は聞き返す。幸は窓の外を見ている。

「そう、嘘。おみやげの話」

「ああ、職場の人がいらないうって言っただって話だっけ」

「そう。職場の人ね、いらないうって言っただけなの。欲しいって言うんだ」

「じゃあ、買ってあげればいいでしょ。空港でも買えるよ。めんどくさかったの？」

「そうじゃなくてね。そうじゃ・・・ないんだけど・・・」

「どうしたの？幸らしくもない。なんかあった？」

「おみやげ、みんなにあげることができないんだ」

春人は、尋常じゃない雰囲気を感じ取った。

何かが始まる予感がする。

別れ話？なんにも悪いところなんてなかったのに？春人の心拍数が跳ね上がったようだ。

胃のあたりが痛い。絶対普通じゃない。

「あのね。私、日本に帰らないの」

窓の外を見ながら、幸は言う。

「え？日本に帰らない？・・・それどういうこと？」

春人は、言葉の衝撃を受け止めきれなかった。

「ビザ取ったの。このまま、タイに住むの。会社から異動辞令がきて。タイで買い付けの仕事やれってさ。ひどいよね、うら若き乙女に海外派遣だよ」

「ちょ、ちょっと待ってよ。タイにこれから住むってこと？」

「そうなの。部屋も取ってあるし、荷物も全部送ってある」

だから荷物が少なかったのか。春人は納得した。

でも、納得できないことの方が多かった。

「じゃあ、日本に帰らないってこと？え？俺はどうしたらいい？」

「・・・一人で帰って」

幸は、まだ窓の外を見ている。表情は見えない。

「私は遠距離恋愛なんて続かない。続ける気もない。私はタイにいる。あなたは札幌でがんばって」

「ちょ、ちよつと・・・冗談だろ？」

幸は窓の外を見て答えない。

「そんな大事なこと、黙ってこの旅を続けてたってことかよ」

春人は、必死になって続ける。

「もしかして、始めからこの旅行自体そのために・・・」

春人の頭は真っ白になった。

「そんなの！そんなのつてあるかよ！」

春人は思わず声を荒げた。バスの他の乗客が何事かと、振り返った。

構わずに続ける。

「そんなの独りで決めて、独りで勝手に結論出すなよ！おかしいよ！」

幸は黙って窓の外を見ている。

「でも、決めたことだから。私はタイに残る」

「だから勝手に決めるなつて！」

焦って春人は続ける。なんとか考え直してほしい。

「おいっ！幸、俺達は付き合って3年だろ！その3年間があつて、この終わり方かよ。そんなのってないんじゃないか？」

しかし、声を荒げて反発しながらもどこか納得するところもあった。

幸もわかってないわけじゃない。

いろんなことを考えて出した結果がこの形だったと。

ここまで追い込んだ状態じゃなきゃ、別れられない。それは幸が一番感じてることだと。

まだ、窓の外を見ながら幸は言う。

「好きって感情だけじゃどうしようもないのよ。私の人生での夢もある。私は自分のインテリアショップを持つのが夢、それにはこの異動は蹴るわけにはいかなかったのよ。あなたも自分の店を持つ夢がある」

幸は続ける

「あなたのことが好き。でも、お互いの道は一緒にはなかった。それだけよ」

理論的には間違っていない。人生という道が一緒になる人もいれば、一緒にならない人もいる。

幸の声は震えていた。肩も震えていた。

春人は何も言えなくなった。

バスは空港に向かう。

幸は、それから春人と目を合わせようとはしなかった。

春人にはどうしたらいいかわからなかった。話が急すぎてまとめることができない。

自分の夢を捨てて、幸を追いかける。

「俺もタイに残る」

そう言えば幸は喜んで、「ウン」というだろう。春人が幸を好きなように、幸も春人のことが好きなのもわかっている。

好きだから、こういう形でしか別れることができなかったのだ。

わかってはいる。わかっては、いる。

バスは空港につき、目を合わせようとしない幸が荷物を運び、搭乗手続きを済ましてしまう。

何かを振り切るように。

「はい、チケット。改札は向こうね。忘れ物しないでよ」

目が合った。

幸は、唇をギュツとかみしめながら、耐えている。自分が選んだ道だから、絶対に泣かないと決めているかのように。

春人は、泣いている。止められない。

「じゃあ、私はここまで」

幸が足を止める。

「私は夢をとった。春人はどうするの？」

幸は、春人をまつすぐ見つめて言う。

「春人の夢を、私にくれる？」

幸の目から涙がこぼれた。感情がこぼれたようだった。

泣きながら言う。

「後、1分で決めて。じゃないと、私があなたを追いかけてちゃう」

泣きながら言う。

「私は、春人が好きなの。好きで好きで、好きで好きでしょうがないの。でも、だめなの。だめなの。二人の恋なのに、私が全部決めて。わがままで身勝手だってわかってる。恨まれてもしようがないの」

泣きながら言う。

「こんなこと言える資格はないけど」

泣きながら言う。

「ありがとう」

春人は、動くことができなかった。

「5」

雑踏の中に、響きわたる声。

「4」

立ちすくむ身体。

「3」

のどの奥がヒリヒリする。乾いて、ねばついて、言いたい一言が出ない。

「2」

まっすぐと見つめるその眼には、不思議な力がある。

「1」

目を離すこともできずに、ゆっくりと動く口元だけを見つめていた。

「0、タイムオーバー」

それが、最後の記憶となった。

幸は、体を翻し、迷いのない足取りで雑踏の中に消えていった。

春人は、幸が見えなくなってもそこに立ち尽くしていた。

2年前の、一つの別れだった。

そしてまたこのタイでの出会いがあった。

それを、人は「再会」と呼ぶのだった。

く7く

春人と幸が2年ぶりの再会を果たした次の日、春人と幸は水上マーケットに顔を出していた。

川べりに暮らしている人間にとって、川は道路であり、道である。

バスのエンジンを元に作ったスクリューがついてある船は、陸地で言う車、現地のタイ人達はうまいもので、すすいお互いに避け合いながら、運転している。

そうした船に乗り、お目当ての水上マーケットを目指すのだった。

船着き場より、水上マーケットのある場所までは時間にして30分ほどの短い距離の船旅になるはずだったが、年末ということもあり船着き場は長蛇の列。

春人と幸、ガイドのハルさんはもう船旅の時間をとくに過ぎ去るくらい並んでいた。

「ごめんねー、春人、かすみ。いつもはこんなじゃないの。もっと人、少ない」

ハルさんは、しかめつらして言った。

「何にもいいのよ。それにしてもいろんな人がいるのね。日本人だけじゃなく、欧米人も多いみたい」

「タイは、今、乾期ですよ。乾期は雨少ない。雨少ないと、旅行楽しい」

「だから観光客が多いのね。ま、私たちもそうだけど」

かすみは、汗をぬぐいながら言った。タイは年中通して暑い。乾期であるこの時期は、カラツとした暑さで過ごしやすいとはいえ、直射日光の元小一時間も外に立っているのは辛い。

もともと、かすみはそんなにタフな方ではないので、顔つきは少しぐったりしている。

「大丈夫？水、いるかい？」

春人が声をかける。幸と再会し思うことは山のようにあるが、顔に出さないよう春人は努めてかすみに優しく振舞っていた。

「大丈夫。ちよつと、暑さが辛いけど・・・」

かすみは、少し無理な笑顔を見せている。

「ゴメンナサイネー。もう少しで順番が来るので、がんばってー」

ハルさんが、申し訳なさそうに言う。確かに、もうすぐ春人達の順番が回ってくるようだった。

船には船頭が一人、乗客を乗せると船が出発し、出発の際に船着き場の係から金を受け取る。船頭は一度も船から降りずに、バトンパスのような形でお金を受け取るのだ。乗客は最大でも5人くらいまで。小さな船が何度も何度も道路くらいの幅の川を往復するのだ。

「やっと、順番来たね。んじゃ、春人さん、かすみさん、乗りこみ

ましょう」

ハルさんが手を取り、一人ずつ乗せてくれる。幸いなことに、春人とかすみは先頭だった。

バルバルバル…安っぽい音を立てながら、船のスクリューが回りだす。

レバー一つで右回り、左回りと変わり、逆回りにするとバックもできるという。面白いもんだ、と春人は思った。

レバー一つで、前後が変わる。生き方なんかも、所詮そんなものなのかもしれない。会社の指示でレバーを切り替えた幸のことを、レバーを切り替えれなかった春人は思った。

船が動きだし、心地よい風を体全体に受ける。

「気持ちいいー！最高ね！春人さん」

かすみが周りをきよろしながら言った。川べりには、現地のタイ人の住まい、野生のココナッツ林、また観光客向けの蛇の描かれた看板などがあつた。

ハルさんが、エンジン音に負けないよう、大声で叫ぶ。

「あの看板は、コブラショーね。蛇のショー。みたい人、けっこうたくさんいる」

そんなハルさんの声も、春人の心には届かなかった。

春人は昨日会った幸のことを思っていた。

隣のかすみは笑顔で、風を受けている。心とは裏腹に春人は、かわいい人だと思った。

そんな春人に気づいたかすみが大声で言う。

「どうしたのー！なにがついてるー？」

はにかんだ笑顔を向ける。何も疑っていない目、優しい瞳。春人は、なんだか心が痛み、目をそむけた。

「なんでもないよー」

そっぽを向きながら、大声で返すと、「ならいんだけどー」と返してくる。につこり笑いながら。

春人の心の中にはモヤモヤとした黒い雲ができていた。

別段、何も悪いことをしているわけでもない。2年も前に別れた女に再会はしたものの、一瞬だけだ。確かに、2年前に旅行に来たとは隠しているが、そんなのは別に言わなくてもいいことだと春人も思う。

もともと、春人はこの旅行で幸との思い出を振り切ろうと思っていた。今まで、どこか胸の奥に刺さっている刺を、苦々しい思い出をかすみと共に抜こうと。

しかし、何の因果か幸と出会ってしまった。その棘は、皮肉にもより深く、突き刺さってしまったのだ。

もう2度と会えないと思っていた。そうやって振り切ろうとした。

それが、目の前にもう一度、手の届くところに現れる。

あの時、伸ばせなかった手を、今、伸ばすことができるのだ。

春人は、風を受けながら考える。自分が何を求めているのか。

そんなことを思いながら風を受けていると、船は速度を落とす。水上マーケットに着いたのだ。

「なんだか風を受けたら、元気になっちゃった。さーて、楽しみましょう！」

新しい船着き場に着き、3人は船を降りた。

川の両側には、歩けるよう道ができていて、川に浮かんだ船の上ではドリアンなどの果物、バミーなどの麺料理といった食べ物から、Tシャツや人形、タイ舞踊に使うお面などおみやげがどっさり売っている。

かすみは、電卓を片手に値段交渉を始める準備も万端だった。

「2時間後、ここに集合ねー。ちゃんとご飯も食べてきてくださいねー」

ハルさんが言うと、かすみは春人の手を取って歩き出した。

かすみの手は、暖かった。その暖かさが春人には辛かった。

かすみは鏡の前でくるりと回った。ひらりとワンピースのすそが翻る。

「ねえ、春人さん、こんな感じで大丈夫かな？ドレスコードのある店って初めてで…」

不安そうな、顔を見せながらかすみは言った。

「大丈夫だと思うよ。ガイドブックにも、そんなに厳しくないって書いてあるし」

そういう春人は、シャツに袖を通しながら言った。暑いタイ旅行に1枚だけ持ってきた、一張羅のグッチのボタンダウンシャツだった。ループタイを通すと、シンプルながらもしっかりとした存在感を見せる。

かすみは、ノースリーブの花柄のワンピースに、薄いカーディガンを羽織っている。長い髪を下ろし、胸元にはバカラのネックレスが光っている。

二人は夕食に、64階建ての高層ビルの屋上にあるレストランに向かった。

タイのトップクラスの料理も味わった方がいいということで、ガイドのハルさんに予約してもらっていたのだ。

エレベーターの前に行くと、スタッフが行き先を聞いてくる。

春人は、イタリアに一人旅をしたこともあり、簡単な英語なら話すことができた。エレベーターに乗ると、かすみが小声で言った。

「なんだかドキドキするね」

「そうだね、タイ料理の最高峰か・・・存分に学んで帰らなきゃ」

少し真剣な顔つきをすると、かすみはにっこりしていた。

エレベーターが付き、廊下を進むと一つのドアがあった。

「welcome!」

そういうと、スタッフが扉を開ける。そこは、空だった。

64階から見下ろすバンコクの街並み。それは、二人の初めて見るものだった。

「ふああ・・・すごい」

目を大きく見開いたかすみが感嘆の声を漏らした。

扉のすぐ下には、レストランに通じる階段があり、その先には大きなバーカウンターといくつかのテーブル席がある。逆側には、大きなステージがあり、黒人のシンガーがジャズの音色を歌っていた。

現地の人間はほとんどいない。欧米人が多い中、二人はテーブルに通された。

「すごいね、周りの人たちなんだかみんなかつこよく見える。映画の中に入ったみたい」

かすみはうつとりして言った。かすみの後ろには、地上にも空にも星を散りばめたようにキラキラしていた。

メニューを見て、春人はイベリコ豚、かすみは鴨をメインでオーダーし、シャンパンを頼んだ。

すぐに二つのシャンパングラスが運ばれてきて、グラスの中もキラキラと輝いた。

グラスを持ち上げながら、春人は言う。

「何に乾杯しようか？」

「…うーんとね」

かすみは考え込んでしまった。その表情に陰りがあるのを、春人は気付かなかったのだが。

そして、春人はしびれを切らして言った。

「二人のタイ旅行に乾杯しようよ」

「いや・・・ごめん。ちょっと待って」

かすみはこだわっているようだ。

「うん、やっぱりこれかな。変わらぬ想いに乾杯しましょ」

かすみはしつかりと春人の目を見て言った。

「あなたを愛する変わらぬ想いに、春人さんは？」

春人は詰まってしまう。それでも、言わなくてはならない。心の葛藤を押しやり、都合のいい言葉を出した。

「変わらぬ想いに」

チンツ。乾いた音がタイの夜空に響き渡った。

「・・・私に対する想いならいいのに」

かすみはつぶやく。春人の耳には届かなかく、首をかしげた。

「ううん、なんでもない。料理楽しみだね！」

かすみは、夜景に目を移した。

料理はどれも素晴らしかった。タイ料理というよりは、創作料理だった。ただ、味付けはやはりタイ風でナンプラーなどが使われていたが。

「おいしかった！最高だね！」

シャンパンから、キールに変えたかすみが言う。お酒に弱いかすみが2杯も飲みほすなんて、春人にはびっくりしていた。

「ちょっと酔っ払ってない？めずらしいね、2杯も飲めるなんて」

「こんなシチュエーションで飲まないのはもったいないよ。ちょっと酔いたい気分でもあったし」

「そうなの？」

「うん」

会話が止まった。がやがやした周りの喧騒の中で、ピンと空気が張り詰める。

「春人さん、嘘ついてる」

「へっ？」

春人は完全に虚をつかれた。かすみが何かに感ずいているなんて、露ほども思っていないかったのだ。

「春人さん、嘘ついてるでしょ？幸さんだっけ？あの人、会ったことあるはず。気付かないとでも思った？」

かすみは、酔いに任せて吐き出した。にやりと笑って続ける。

「気づいたよ。女の勘って鋭いのよ」

春人は、少し放心していたが、慌てて言った。

「いや、あれは昔の友人で、今更言うこともないと思って…」

その先が続かない。かすみは、まっすぐと春人の目を見ている。

「…いや、変に話しても仕方ないか。ごめん。確かに幸は知ってるし、昔の彼女だったんだ」

「ふうん」

「あの時はびっくりしたけど、でも、今は何もないよ」

「ふうん」

かすみはキールを飲み干した。空になったグラスをそっとテーブルに戻すと、そつと言った。

「私はね、春人さん。あなたが好きなの。たぶん、あなたが私を好きじゃなくても、私は好きであり続けれると思う」

かすみの目には、涙が浮かんでいる。かすみは、うつむきながら続けた。

「それだけはわかってね」

ポタポタと落ちる涙を見せないようにしているかすみを見て、春人は素敵な女性だと心底思った。

それでも、幸という棘が抜けないのが、春人には悔しかった。

そして、最終日の夜は更けていき、日本に帰る朝を迎える。

最終話

朝を迎える。

日本までの飛行機は7時間半。朝一番の便の飛行機のため、ホテルのチェックアウトは6時。その時間にハルさんがロビーで待っている手はずだった。

春人とかすみは、昨日の夜のことがあったにも関わらず、いつもと変わらないように接していた。何かを隠すように。そして、触れてしまうと何かが溢れてしまうかのように。

「おはようございますー。タイの最後の朝です。心残りはないですか？」

ハルさんは、今までと変わらずに笑顔を見せた。

「ありがとう、ハルさん。あなたのおかげで、この旅もすっごく楽しいものになったよ」

ハルさんは荷物をバスに詰め込みながら言った。

「二人、仲のいいカップルだったからがんばった。私も、付き合っている人、いる。でも、ケンカ多い」

「えー、ハルさんの彼女ってどういう人なの？」

「恥ずかしいから教えない。でも、きれいな人よ。いつか、日本に旅行に行くときには連れて行く」

「じゃあ、ぜひ札幌に来てよ。ハルさんみたいにうまくできないけど、私がハルさんのガイドになるからね」

「じゃあ、その時はお願いするね。じゃあ、バス、出発するね。空港まで1時間、早いから寝てていいよ」

「なんだか、寂しいなあ・・・タイともお別れかあ・・・」

かすみはハルさんとひっきりなしに話し続けた。春人はその横で眠ろうとした。もちろん、眠ることはできなかったのだが。

「じゃあ、私はここまで。私も楽しかったよ」

バスは空港に着き、ハルさんが荷物を降ろしながら行った。搭乗手続きも済んでいるので、後は改札に向かうだけになった春人とかすみを残し、ハルさんに乗せたバスはまだ朝もやの翳る道路の向こうに消えていった。

無言で荷物を二人は運んだ。改札に向かう途中で、春人は足を止めた。

そこは、2年前のあの場所だった。幸が立ち止まった場所。かすみは、何も言わず改札に向かう。春人の足が止まったのはわかった。何も言わないのではない、言えなかったのだ。

5歩ほど、かすみは歩き、足を止めた。振り返る前に、春人が言った。

「・・・ごめん」

春人の胸のうちはもう決まっていた。自分の気持ちを整理する旅の中でこんなことになるとは、誰が想像できただろうか。

「ごめん。俺、行かなくちゃ。行かなくちゃだめなんだ」

振り返ったかすみは、目に涙を浮かべながら堅く唇を噛んでいる。決して泣かないと決心しているかのように。

「かすみのこと、好きなんだ。でも、行かなくちゃならない。ここで行かなくちゃ、俺はずっとここから飛び立てないんだ」

空調の効いた空港の中、二人の周りの空気だけより一層温度が下がったようだ。人ごみの音が、遠ざかる。

春人はスーツケースの上に置いてあった絵を見た。透明なビニールでくるまれたひまわりは、優しく微笑んでいた。

「2年前、あの人は・・・」

「いいの。何も言わなくて」

春人の話すのをさえぎるようにかすみは言った。

「いいの。言わなくて。気付いてたけど、気付かないフリをしていたの。でも、こんなに急な話になるとは思ってはいなかったけど」

「ごめん」

「春人さんと付き合ってから、春人さんの心の中に私の届かない場

所があるのは知ってたの。でも、それがあの人なんてね・・・こんなに広いタイって国の中で、どうして会わなきゃならなかったのかしらね」

かすみは続ける。

「私があのお店に入らなきゃ、今頃幸せな気分で飛行機に向かってたんだね。悔しいな・・・でも、もう春人さんの気持ちは決まっちゃったんでしょ。わかったわ。飛行機には私独りで乗るね」

春人はかすみの顔をじっと見つめていた。何も言える訳がない。自分勝手なわがままで、一人の人生を狂わせようとしているのだから初めての海外旅行で恋人に逃げられるなんて、とてつもないトラウマになるはずだった。

「幸さんだっけ？ 芯の強い人だよ。一人でタイに来て・・・きれいな人だったね」

「うん、強い人だよ。俺なんか全然かなわないくらい」

「でも、春人さんは追いつこうとしてる。あの人に真正面から。私にはそんな強さないから。ここで、春人さんの手を引っ張ることすらできないの・・・」

かすみは、下を向いた。床にポタポタとシミができた。春人は見ないふりをした。

「いつてらっしゃい。私は私のできることをする」

かすみは大粒の涙をこぼしながら笑顔を見せた。儂く、もろく、け

どひっそり確かに咲いている一本のかすみ草のように。

「私は、あなたが好き。好きでい続けるから」

笑顔で手を振るかすみの目を春人は見た。涙で濡れているその目には、強さがあつた。

春人は心の中で数えだす。

5、4、3、2、1、そこまで数えたところで、くるりときびすを返し、歩き出した。

あの日の幸のように、迷いのない足取りで。そして、春人はもう振り返らなかつた。

キキーっとタクシーが止まる。交通事情の悪いタイのタクシーはストップ＆ゴーを繰り返す。エコドライブとは正反対だ。

扉が開くなり、春人は駆け出した。

スニーカーを店の前で放り出し、ひまわりの絵だけ持って店の中に入る。

キョロキョロとあたりを見回すが、幸の姿は見えない。

店内には、タイ人の店員が一人。幸いなことに英語が通じたので、幸がどこにいるか聞く。店の裏で、絵を描いていると言われ、春人は走り出した。

どうなるかなんてわからない。ただのひとりよがりの行動なのかもしれない。それでも、春人には動くしかなかった。

店の裏には、公園があり、暑い日差しを浴びながら幸が絵を描いているのが見えた。今度は、公園の中の大輪のバラの花だった。

「幸っ！」

春人は大声を出した。幸が振り向く。そして、大きく目を見開いた。

「春人？どうして？」

春人は幸の前で止まり、肩でゼイゼイと息をした。のどはからからで、声が出ない。でも、今回はなんとしても言わなきゃならなかったのだ。

「幸・・・俺・・・全て、ぶんなげてきたよ。全部、ゼーんぶ」

幸は何も言わない。春人が続ける。

「2年かかったけど、やっと追いついた。幸に手を伸ばせるところにまで来たんだ」

春人は、幸を見た。あの時と同じようにまっすぐに目を逸らさずに。幸の口が動く。

「5」

幸の目は笑っているようだった。

「4」

春人の目からは涙があふれていた。あのとき、止まっていた時間は今動き出したのだ。

「3」

春人の体が動く。

「2」

春人は、幸の小さな華奢な体を抱きしめた。

「1」

そして、続きが言えないようにキスをしたのだった。長い長いキスを。

タンツとキーを叩いて、俺は大きく一度伸びをした。キーボードを叩くのはまだまだ慣れなかったが、少しずつ文章を打ち込むのも早くなっていた。

コンコンとノックの音が聞こえた。ドアが開き、声をかけられた。

「また、パソコンなんかいじって。明日の仕込み早いんでしょ？も

「う寝たら？」

「わかってるよ。だからもう寝るよ。それより、聞いてくれよ、完成したんだ！」

「本当！結局どうやって終わらせたの？実際のままじゃないんですよ？」

「こんな感じ。読む？」

声をかけて、俺は椅子から降りた。部屋を出て、コーヒーを入れなおすことにした。料理人足るもの、しっかりとコーヒーにも気を遣いたいところだけど、家の中くらいはインスタントで充分だ。

お湯を沸かし、コーヒーを2つ入れる。一つはブラック、もう一つには角砂糖を2個入れた。

カップを持って部屋に戻ると、声をかけられた。

「こんな風になる訳ないよ！2年も待たせてたんでしょ？すぐに抱き合うなんてね」

「変かな？ドラマチックに終わらせたつもりだったんだけどな」

「もうちょっとリアリティがあったほうがいいかもね。でも、空港のシーンはやっぱりリアルだね」

「そうでしょ。合格点？」

「うん、なかなか。待つ強さってわからない人って多いんだよね。」

待つつていうのも、一つの行動なのに、次から次へと動くことがいいことみたいに見られるでしょ？恋愛って、それだけが全てじゃないのよね」

「そうだね」

「さて、明日からまた仕事が始まるんだから早く寝ない？」

「もうちょっと起きてるよ。ハガキ、全員に書いてないんだ。先に寝てていいからね」

「んー、じゃあ、式のアルバムでも見ながらベッドにいるね。結婚しましたハガキは、私はみんな書いちゃったから、明日からはゆっくりするんだ」

「いいご身分なこと。家のことは任せたよ」

「了解。あんまり遊びすぎちゃだめよ」

俺は、軽くキスをするとパソコンに向かった。

そして、部屋で一人になってから、机の中から一通のハガキを取り出した。満面の笑顔の二人が写った結婚しましたハガキだった。

ただ、ちょっと他のと違うのはエアメールだったこと。

これは、内緒にしなきゃならない。見つかったら、事件になってしまふ。

宛名書きは終わってるから、あとはメッセージだけだ。なんて書こ

う？

少しだけ悩んでから、俺は「ありがとう」とボールペンで書いた。

でも、想いなおして、ありがとうと書いた場所をグリグリと塗りつぶし、代わりに書いた。

「ざまあみる」

完全な負け惜しみだけど、まあ良しとしよう。あの時、ガツンと言われたから、今の幸せがあるんだから。

エアメールを机に戻し、ふと後ろを見る。

壁にかかっているひまわりとバラの絵が、少し笑った気がした。

「タイムオーバーって2年前に言ったでしょ？無理よ。いまさら。でも、もがいて悩んで行動した後だから見えてくることってあるんじゃない？待っててくれる人がいるんでしょ？大事にしてあげなさい。ってかね、私には恋人がいるの、タイ人で日本人向けのガイドをしてるんだけどね・・・」

最終話（後書き）

お付き合いありがとうございました。

ぜひ、ご感想をいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8324o/>

始まりの終わりの始まり

2010年11月18日02時57分発行